

男女共同参画・働き方改革委員会企画 JOYFUL通信

◆◆◆ 整形外科単科病院で働いています ◆◆◆

吉田整形外科病院

坪井 亜紀子

私は大学を卒業後、2つの総合病院に合わせて10年間勤務した後、2人の子供を出産、産休育休を取得しつつ現在は整形外科単科病院で常勤医として働いています。当院は78床で、リハビリテーションクリニックを併設しています。整形外科常勤医9人のうち女性医師が私を含め3人、また常勤麻酔科医2人のうち1人は女性で、脊椎手術（腰椎ヘルニアや脊柱管狭窄症）や膝関節の手術（半月板縫合やACL再建、人工関節）、外傷その他の手術を行っています。手術室では麻酔科医、術者、助手、看護師すべて女性ということも珍しくありません。外来は病院とクリニックを合わせて週5回あり、育児中の女性医師は午前診のみで午後は手術や脊椎検査、月2回の骨粗鬆症外来などを担当し基本的には17時頃までに仕事を終えて帰ります。当院で女性医師が働きやすい点は、子育て中は外来を午前中だけにしていること、当直がないこと、預けられない場合の子連れ出勤が可能であること、また、常勤医で不足が生じる場合は非常勤の先生を頼むなど、常勤医を続けやすい環境を整えていることだと思います。

私は産後6カ月で復帰しましたが、子どもが保育園で次々と病気をもらって入院することも多かったため、入院先からの出勤を何度も経験しました。仕事を続けるのは無理だと何度か退職を考えましたが、自分や主人の実家に子どもの世話を頼むことができ、職場でも仕事を減らしてもらい、周囲

の多大なサポートのおかげで細々と臨床を続けてこられました。最近はずっと成長するに伴い体調を崩しにくくなったため、落ち着いて仕事に臨めるようになっていきます。このように子育て期は子どもの病気で職場に迷惑をかけることや、子どもに無理をさせることへの罪悪感、家に帰っても働きづめでやる気はあっても自分の体力がもたないなど、長時間労働できない理由が事実としてあります。女性医師の比率が高くなっている今、ライフイベントに合わせた余裕のある職場づくりで、女性医師が離職せずにいられることは重要だと思います、当院では特にそれを感じます。

当院のような病院は大学病院や総合病院と違って最先端の医療や珍しい疾患を研究するという環境にはありませんが、地域のかかりつけ医として多くの外来診療を行っており、多数の症例を経験できます。また一人の患者さんを初診から術後のリハビリが終了となるまで一貫して責任を持って診療することができるなど、整形外科医にとって魅力のある職場だと思います。慢性的な医師不足は当院も同じですが、公的病院と違って雇用条件の融通が利きやすく、当直や夕診ができない女性医師であってもニーズがあります。昨年勤続10年のお祝いを病院からいただきました。周囲のサポートがあつての現在ですが、毎日の診療にやりがいを感じています。今後も医師という仕事を続けていきたいと思

ますし、地域医療に貢献できると感じています。

